

第2講「想像力の死角？ 構造的愚かさについての一考察」前半
D・グレーバー『官僚制のユートピア』（pp.64-112）

文責：K原

今回の主な内容

1. 構造的愚かさについて
2. 構造的暴力について
3. なぜ構造的暴力が成立するのか

1. 構造的愚かさについて（pp.64-81）

官僚制についての話（グレーバー母の話）

グレーバー母の話（官僚制の具体例）

2006年、メディケア（アメリカの高齢者・障害者用保険制度）に申請するようにソーシャル・ワーカーからアドバイスを受ける。しかし、資産総計が6千ドルを超えてはならないので、彼女の預金口座を別に移すことに。その直後、療養施設でリハビリを行うことに。その時彼女は自分の名前を自分でサインすることが困難になっていた。メディケア申請書を作成した後だったが、ステータスの一時停止を証明するために書類提出が必要だった。そこで書類を作成し提出しようとするが…

「ここにじぶんで書かれたサインがない書類は受け取りができないのです」

- 官僚制は無茶な要求を行い、それに応じられない個人を責める仕組み（pp.68-9）
 - 官僚制というものは、その組織形態からして、大部分の人間にとっては、その業務をきちんとこなすことが不可能であるといったふうになっているように見える（p.68）
 - 官僚制とはユートピア的な組織形態である（p.68）＝官僚制とはフィクションである
 - 官僚制は、不可能な基準を設定して、それに即することのできない人間を責める事態になっている。妥当だと自称する要求を提示して、その要求が本当は妥当ではないことがわかっていても、問題はその要求にではなく、それに応じられない個人の無能にある、と結論づける。
- 官僚制の手続きの中の構造的愚かさ（pp.69-70）
 - 官僚制の手続きの中に自分があるとき、自分が投資したエネルギーは、自分に官僚制の権力を及ぼしている相手を理解し、影響を与えたいという試みに投入されている。だから、公証人の無能ぶりをバカにしているようにみえないように気を使ったり、銀行員たちに同情しているようにみえるにはどうすればいいか考えてしまう。ついに、彼ら彼女らの指示が愚かであっても気がつけなくなる
 - その指示が愚かだったとして、その規則を曲げることのできる力をもった人物は自分の対面している人物ではないし、もしもそのような人物に会えたとして、結局もめることになるだけだ。
→構造的に愚か

□ 私たちの社会にペーパーワークは「必要不可欠」？ (pp.70-4)

- 人類学者は、社会的に効力のある儀礼的身振りに関心を寄せるが、しかし、社会的に効力をもち、実際に変化を及ぼしているのはなによりもペーパーワークである
- 死亡証明書がなければ、社会的に死を迎えたことにはならない
ペーパーワークは社会で生きる私たちにとって必ず「必要」ということになっている（誰も必要ないってわかっているのに。→構造的に愚か）
- ペーパーワークは退屈である。時代を経るにつれて、カリグラフィーや紋章の装飾がなくなり、いまでは味も素っ気もない。ペーパーワークは単純であり自己完結的であるよう設計されている。外部のなにものにも開かれておらず、解釈の余地がない。一方、官僚制をめぐる作品はたくさんあるが（作品名は p.75 参照）、興味深いのは、それらの作品のほぼすべてにおいて暴力の空気がみなぎっていること。暴力を対象とする現代の小説も、官僚制をめぐる小説となる傾向にある。

□ 官僚制を批判している大学人（ヴェーバーとフーコー）でさえも官僚制の下にある (pp.76-81)

- 大学人も官僚であり、ますますそうになっている
- 研究者（大学人）の中で官僚制について批判したのは M・ヴェーバーと M・フーコー
- 彼らの官僚制についての研究は魅力的ではあったが、ヴェーバーの研究は、そのうち楽天的部分を官僚の現地訓練のために再発明され、フーコーの研究は、政治的権力や社会運動の影響から切り離され、机上の空論になってしまった。
- 官僚制を批判している研究者でさえも、官僚制の下にあり、それは変えられない。
→構造的に愚か

2. 構造的暴力について (pp.81-)

- なぜ官僚制の下にあって、それが愚かだとわかっているのに（批判されているのに）それを変えることができないのかというと、構造的暴力により、それが強いられているから。官僚制の手続きは、例外なく構造的暴力に基礎付けられている。
- 構造的暴力は、官僚制は我々の生活のあらゆるアスペクトに浸透し、そして、なぜ我々がそれに気づかないのかについて多くを教えてくれる。
- 構造的暴力の「暴力」とは、文字通り誰かを殴りつける、という意味での暴力である。このような暴力を振るうことは、実力（フォース）の脅威に依拠するシステムをもつ政府により規制され保障されている。実力（フォース）とは、棍棒で他人の頭をぶん殴る意志をもちながら制服で身を固めた人間を招集する力能のことである。→政府によって暴力を振るうことが正当化された存在がいる。
 - ◇ アルファ族とオメガ族の例 (pp.83-4)：オメガ族はみずからの不名誉を内面化し、あたかもじぶんたちに本当に罪があると信じているかのようにふるまいはじめる。そのようにさせる仕組みの総体が暴力の果実であり、この仕組みは継続的な暴力の脅威でもってのみ維持可能である
- 構造的暴力とは、暴力の脅威によってのみ形成され維持されうる諸構造である。

→その中身は全く意味がない。仕組み事態が暴力になっている（性暴力の発生率の例（pp.84-5））

- 政府は根本的には強制による制度であり、規則（ルール）を策定し、それに従わない者を物理的
危害で脅迫するという実践を行なっている。

☆ グレーバーが調査したマラガシの例（pp.87-94）

- 1875-1950年のメリナ王国のコミュニティについて、人口調査の結果、学業成績、各家族
の規模や土地、家畜（初期は奴隷）といった資産の正確な数字のデータを入手した。
- しかし、グレーバーがマダガスカルを訪れた時は、誰もよそ者にそのようなことをしゃ
べりたがらない。徐々に政府が日常生活を規制していないというだけではないことがわ
かってきた。しかし、政府はまったくなにもしていなかった。役所は存在したし中で働い
ている人もいたが、それは主に見せかけのためだった。

→あるレベルでは、官僚制の力は人々にはなんの影響もほぼ及ぼしていないが、その一方で
あらゆるものに影を落としている。

<フランスによる植民地化以前のメリナ王国>

- ほとんどの住民が王国の中心部に住む奴隷所有者だった
- 主人は望むがままのものを奴隷に命じることができるが、奴隷はそれについてまったく
なにもなしえない

<1895年フランスによるマダガスカル領有>

- メリナ王国をフランスが崩壊させたが、以前と変わることなく優越する武力をもって政
府を押し付けた。

→ほとんどのマラガシ人が、じぶんたちはみな奴隷に転落したのだと結論づけた。

- フランス語とマラガシ語の言語コードの例…小役人が、恣意的な命令を押し付けたいと
きには、ほぼ例外なくフランス語に切り替えられた（マラガシ語は、熟議、説明、合意形
成にふさわしい言語とみなされた）。小役人がフットボールの試合をみに早引けしよう
としていたときにグレーバーが訪れた時…（p.90-1）愚かすぎて…
- ここではフランス語は「命令の言語」と表現できる。→なぜなら純然たる物理的暴力への
不平等なアクセスを想定することによって、上記の例のような文脈が形成されているか
ら。

3. **なぜ構造的暴力が成立するのか（pp.94-**

- 暴力は、恣意的決定を可能にし、総体的に平等主義的な社会的諸関係に特有の討議、説明、再交渉を
回避する。この暴力の力能こそが、その暴力の犠牲者の眼に、暴力を基盤にして形成される手続き
を、愚かしい、ないし、筋の通らないものとみせてしまう原因である（＝構造的暴力があるので構造的
的に愚かになる）。
- 暴力は、「解釈労働」（＝ひとの表面上のレベルを超え、深く意図や動機などを把握したいというとき
の解読の努力）に参与する必要はないし、一般的に参与することはない。この「解釈労働」を省略す
ることを可能にする暴力は、全くコミュニケーションであることなしに、社会的諸効果をもたらす可
能性を提供できるただひとつの人間の行為の形態である。

- 「解釈労働」の必要を除去する力能がもっとも顕著なものになるのは、暴力それ事態がもっともみえにくいようなとき（＝明らかな物理的暴力の起きる可能性としてはもっとも低いとき）である。このために、構造的暴力の状況は、例外なく、きわだって不均衡な、想像力による同一化の構造を生み出してしまふ。構造的暴力の効果は、不平等の構造がきわだって深く内面化された形態をとる場合にもっとも可視となる。
- ☆ ジェンダーの例など…「女たちを愛しなさい」「だが、女という生きものがなにを考えてるのか、いったいだれがわかるんだい？」男性によれば、女性の論理は根本的に異質で不可解である。一方女性たちはといえば、女性は男性を理解することを選ぶしかない（＝男性たちがマジョリティの社会の中で、男たちがなにを考えているのかを理解することに時間や労力を費やす以外に選択の余地がない）
- 主人－召使、男性－女性、雇用者－被雇用者、富者－貧民…構造的不平等（＝構造的暴力）は、例外なく高度に偏りのある想像力の構造を形成してしまふ。つまり、社会的階梯の底辺（や、下層）に位置する者が、多大なる時間をかけて、頂点にある者たちにみえているものを想像したり、心から気にかけてりするのに対し、その逆はほとんど起きない。
- このような、暴力そのものに次いで、[不平等な]諸関係を維持する単一の最大の力が、[想像力の構造]である
→なぜ構造的暴力が成立・維持されるのかということ、そもそも暴力にはコミュニケーションがないから。そして、偏った想像力の構造が形成されるから。

警察と警察のイメージ

- 暴力の正当な管理運営は、「刑法執行機関」、とりわけ警察官にゆだねられている。警察は、その時間の大部分を、誰がなにをどこで購入できるとか喫煙可能とか売却できるとか、はてしなく些末な規則（ルール）や規制（レギュレーション）を押し付けることに費やしている。だから、警察とは武器をもった官僚なのだ。
- 警察が出てくると同時にペーパーワークも発生する。調書の提出が必要になる。そのため、強盗や盗難の大多数は、作成すべき保険証書があるとか再発行すべき紛失書類があるとかがなければ調書は発行されない。だから、ほとんどの暴力犯罪は警察を巻き込むまでに至らない。
- 警察の指示に従うことを拒否した場合は、まず間違いなく暴力的な強制力が適用される
- …はずなのに、なぜ警察のイメージが本や映画、テレビ番組などでは英雄的なものになっている（＝想像上の警察、イメージの世界）
- 官僚制社会は、それに特有のかたちのカリスマ的英雄を生み出す傾向をもっている。

官僚制的知と理論的知（社会理論）

- 官僚制的知は、物事を単純化してしまふ。2%しか視野に入っていない。が、理論的知（社会理論）にも同じようなことが起こってはいる。しかし、それは新しいことを言おうとするときには有効。
- 構造分析によって、情報と暴力の関係がよく見える。
- ☆ ジェームズ・ボンドとシャーロック・ホームズの対比の例（p.110-2、2人の比較の詳細は p.111を参照）

- 官僚制的秩序によってこそ、2人の意味と存在が保障されている。
…想像力の話に続く？

<メモ>

表：2020年度実施新学習指導要領「外国語科」小学5・6年生評価の観点及びその趣旨

知識及び技能	思考力・判断力・表現力等	主体的に学習に取り組む態度
(1)外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。	(2)コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いた話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読みたり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。	(3)外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

出典：文部科学省 2018 「小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編 平成 29 年 7 月一平成 29 年告示」 168 ページを元に著者作成